

# 茜さす [下]

永井路子



# 茜さす [下]

永井路子

読売新聞社

著者紹介——ながい みちこ

1925年，東京生まれ。東京女子大学国語専攻部卒業。  
昭和39年『炎環』で第52回直木賞，昭和57年『氷輪』で  
女流文学賞，昭和59年歴史小説を中心とした多年の作家  
活動に対して，第32回菊池寛賞，昭和63年4月『雲と風  
と』ほか一連の歴史小説に対して第22回吉川英治賞をそ  
れぞれ受賞。著書は『北条政子』『乱紋』『この世をば』  
『つわものの賦』『絵巻』『山内一豊の妻』『美貌の女帝』  
ほか多数。



あかね  
茜さす  
(下)

定価 一、五〇〇円

著者——ながい みちこ  
永井路子

編集人——杉林 昇

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一  
〒一〇〇一五五  
大阪市北区野崎町八の一〇  
〒五三〇  
北九州市小倉北区明和町一の一  
〒八〇二

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——一九八八年(昭和六十二年)五月十七日

ISBN 4-643-88044-9 C 0093

© 1988, Michiko Nagai

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

茜さす  
(下)  
目次

|     |      |     |     |     |      |
|-----|------|-----|-----|-----|------|
| 峠   | 土の言葉 | 華燭  | 石と瓦 | 光る壁 | 竜のあご |
| 184 |      | 129 | 85  | 45  |      |
|     | 160  |     |     |     | 7    |

壬申に行く

212

星を浴びる

247

幻を追う

283

三〇六号室

319

われら個族たち

358

おわりに

397

装画 今村昌昭  
装幀 中島かほる  
地図 重原保男

扉絵・本文さし絵 川崎鈴彦

茜

さ

す

(下)



## 竜のあざ

Nの『徒然草』<sup>つれづれぐさ</sup>の現代語訳は、しかし、現実にはなかなかできなかった。

「本気になって催促しなきゃだめよ」

山城かえでは、毎日のようにきびしいことを言うが、P社の川澄は、いまはなだめる側にまわっている。

「ま、友田さんに任しとこうよ、山城さん。初日におばちゃんの関門を突破したくらいだから大丈夫だと思うよ」

あの日、知恵を絞ってNに会ってきたことを評価してくれているらしい。が、それは、多少買被りだと、なつみは感じている。腕がよかったのではない。それまでNと川澄の間がこじれていたのだ。川澄がひっこんだので、Nの心もほぐれたのである。

——でも、それは川澄さんには言えないことだわ。

まして、Nの前では、川澄がぼろくそにけなしていたことなど、匂わせてもいけないのだ。人生には、言ってはいけない部分がある、というより、言ってはいけない部分のほうが多いことを、なつみは知らされた。

——いままで、私って、何でも好き勝手なことやってきたけど……。

世の中は、言いたいことを言わずにいることで、どうやら均衡を保っているものらしい。

——そこへいくと、川澄さんて、子供みたい。

年上の男なのに、やんちゃ小僧みたいなどころがある、とふっと肩をすくめなくなる。何回か顔をあわせて話してみると、根は正直で、

「ほんとはまだ締切りは先でもいいんだよ」

本音をちょろりと洩らしたりした。

「ただ、いまのうちに、おぼちゃんのネジ巻いとかないと、後でオタオタするからな」

そう言われて気を緩めたわけでもないのだが、日を重ねるにつれて、なつみの身边にも、どっと仕事を押しよせ、『徒然草』だけにかかりきりになれなくなったのだ。

「この資料返しという。お礼状はていねいに書いてね」

ベテランの先輩たちが、そんなふうに次から次へと後始末を押しつけるのだ。

「カメラのAさん断つというね。スケジュールがあわなくなっちゃったから」

加奈田ゆきには頼めないようなことが、あれこれまわってくる。まちがえないでやるためには、スタッフ全部の仕事を一応のみこんでおかねばならない。こんなふうにして、半月はまたく間に過ぎて、梅雨の季節が始まっていた。

川澄は二日に一度くらいのペースで顔を見せる。

「ようっ、友田さん、元気？」

そのたびに、山城かえでは、すまなそうに言う。

「ごめんなさい、新米だもんだから、仕事が遅くて。友田さん、Nさんに催促電話入れた？」

「は、はい、昨日はずっとお留守で」

「また、例の居留守でしょ」

とりなすのは川澄のほうだ。

「ま、コンタクトは取れてるんだから。ときどき催促してくれればいいよ」

川澄自身もNのことだけでやってくるのではない。X社系の若い女性むきの娯楽雑誌にもタッチして、自殺未遂のタレントの緊急取材などという仕事も持ちこんでくる。こんなときの川澄は手の打ちかたが冴えていて、

「この事件の真相を知ってるのはDだけだから、そこで密着取材をしてよ」  
誰<sup>だれ</sup>も知らないことを言う。彼が帰った後、

「川澄さんて、ずいぶんいろんなこと知ってらっしゃるんですね」

なつみが加奈田ゆきにささやくと、

「あの人？ ええ、もとは芸能誌のベテラン記者だから」

思いがけないことを教えてくれた。

「へえ、そのかたがP社に入ってたのは、どうして？」

そこまで知る必要はない、というように、ゆきは返事もしない。

今度の古典シリーズは絵入りの豪華本であることが特長になっている。だから前もってそのほうの資料も集めなければならない。ある日、川澄は、そのリストを持ってやってきた。

「もう、これだけ集まってるんだけど、これとこれはまだなんだ」

その中の一つ、絵巻物ふうのものを入れたいのだが、それを持っている某研究所が、実物の撮影はおろか、ネガも貸してくれないのだという。

「ネガはだめだ、焼いた写真なら貸すって言いやがんの。ケチだよな、まったく」

そこへ行つて借りてきてくれ、ということだったが、そこまで話が進んでいるのだったらNのときのようにこずることもない、となつみは思った。

「それでねえ、X社の社員が借りにいくつてことになつてゐるから」

川澄は吉兼京子、と刷られた一枚の名刺を渡した。

その研究所は、都心から地下鉄と私鉄を乗りついで一時間ほどしたところにあつた。古びた、天井の高い洋風の建物で、森閑として人の気配がない。五分と間をおかずに電話のベルが鳴り、人の出入りの慌しい楓企画とはなんと違う違ひであろう。教えられたとおりに「中世美術研究室」という札のかかった部屋の戸をノックした。

「X社の吉兼と申しますが」

立ってきたのは、痩せ型の背の高い中年の女性だつた。名刺を出すと、

「『徒然草』の絵巻でしたね。ちょっとこちらでお待ちになつて」

椅子を指さしてそう言い、女性は資料室らしい奥の部屋に姿を消した。昔風の薄暗い部屋には、ほかに二人の男性がいたが、それぞれ資料の山に埋もれたまま、なつみのほうをふりむきもしない。ややあつて、女性は大判の写真を三枚ほど持つて現れたが、すぐには手渡そうとせず、

「X社は、実物の撮影をしたい、なんっておっしゃいましたけど、それは困るんです。貴重なものに、やたら強いライトをあてるなんて、とんでもないことですわ」

冷たい口調で言う。いかにも美術品の扱いを知らないX社を軽蔑している感じだが、なつみは黙つて頭を下げるよりほかはない。

「ネガも困るんです。いつかお貸ししたら、とうとう一枚なくされてしまつて」

「それは申しわけありませんでした」

「いえ、X社のことではありませんけど」

それならそうと早く言ってくれればいいのに……。その女性は三枚のカラー写真を並べると、尋ねた。

「どれをお持ちになりますか」

なつみはとっさにはきめかねた。

「あの、三枚とも拝借できませんでしょうか」

「使うのはい枚というお約束でしたが」

「はあ、でも、編集長と相談したいと思いますので」

うなずいて女性は書類を出した。

「借用書を書いてください」

所要の欄に題名、枚数等を書きこむ。

「印鑑を」

うっかり、自分の印鑑を出しかけて、なつみは、はっとした。どうやら、その手許に相手は気づいたらしい。

「どうなさったんですか」

相手の女性の眼はきびしくなっている。

「いえ、あの……」

「印鑑を押してくださいださればいいんです」

「いえ、あの、それが……」

心臓が止まる思いだった。いったい何と言いわけしたらいいのか……。が、もたもたしていると、かえって怪しまれる。

「申しわけありません」

なつみは思いきって頭を下げた。

「じつは、私、吉兼京子ではないんです」

「えっ、まあ」

女性は、まじまじとなつみをみつめている。

「あの、じつは……吉兼が急病になりましたので、私が急に伺うことに……」

でたらめを言っても、その場をつくろうよりほかはない。

「というと、あなた、吉兼さんではないのね」

相手は訊問口調になっている。

「は、はい」

「じゃ、あなたの名刺を」

「あの、それが、入ったばかりで、名刺がないんです」

「でも、身分証明書はお持ちでしょ」

なつみは絶句する。早くも相手は三枚の写真を机の上からとりあげてしまった。

「そういうかたにはお貸しできません」

「申しわけありません。X社の下請けをしております楓企画の友田と申します。X社から命じられまして

……」

「こちらの研究所は、そういうところとは交渉を持たないことにしています。責任の所在が不明確ですか

ら。あなたがもしこの写真を返さないとしますね。こんなときX社に文句をいっても……」

「お返ししないなんて、そんな」

「でも、万一つてことはありません。第一、あなた、はじめX社の吉兼だと言い、次にはその代理だと言  
い、その後で楓企画とかの人間だと言うじゃありませんか、そんな人誰が信用するのですか」

「……………」

「お借りになりましたければ、編集長さん御自身が来てください」

とりつくしまもなかった。

大失敗である。

帰社して、なんと報告したものか？

研究所の外に出ると、雨が降りだしていた。そのときになって、傘を持たずに出てきたことになつみは  
気づく。

——しかたがない。濡れていくよりほかはないわ。

私鉄の駅までかなりの道のりである。細かい雨に包まれて、街の風景は、突然、色を失ったように見え  
る。自分が銀灰色の、この世ならぬ世界を、とぼとぼ歩いているような気がする。そういえば、研究所の  
中也暗い灰色だったし、女性が細い冷たい声で問いつめている間も、同じ部屋の二人の男性は、こちらを  
ふりむきもしなかった。

雨脚は少し強くなって、なつみの長い髪はべったり肩にまわりつきはじめた。生なりの麻のジャケッ  
トは、たちまち雨を通してしまったが、なつみは、雨を避けて走る気にもなれなかった。

——このまま、灰色の街がずっと続いていればいい。そして自分もその中に吸いこまれてしまったら、  
どんなにらくだろう。

が、否応なく駅は近づいてくる。電車に乗ったとき、雫をしたたかせた自分の異様な姿に、いっせいに乗客の視線が集まった。

——はあ、この子、なにかあったな。

みんながそんな眼で見ている。

そうなんです、私って、とんでもないことしちゃったんです、と大声で叫びたいくらいだ。しかし、この中の人々の好奇の眼にはまだ耐えられる。楓企画に帰ったときのことを、考えただけで身がすくむ。川澄からどんな罵倒をあびせられることか。

神保町で地下鉄の階段を上りきると、外はもう夕闇に包まれていた。重い足をひきずって、楓企画の扉を開けると、山城かえでは、煙草を片手に、電話をかけているところだった。二、三人の女性が加奈田ゆきの机のまわりで打ちあわせをしている。ふつうのオフィスタイムよりも、この時間のほうが部屋は活気づくのである。

「あ、御苦労さま」

電話を切るなり、山城かえではなつみに言った。

「あの、社長……。それが」

うなだれて事のてんまつを話す間、無言だったかえでは、終りまできかずに、煙草を灰皿にこすりつけると、ダイヤルをまわした。

「あ、川澄ちゃん、ちょっと来てくださらない。困ったことになっちゃった。友田なつみが、ドジなことしちゃったのよ」

山城かえでの鋭い声に、一瞬、部屋の中はしんとし、加奈田ゆきの机の前にいた女性たちは、いっせになつみのほうをふりむいた。が、ゆきだけは、眼をあげもせず、いつものとおりの冷静さで、